早稲田文学（第 10 次）発行停止にあたってのご挨拶

第 10 次およびそれ以前の「早稲田文学」に力を貸してくださった、すべての読者のみなさまと、多くの著者や翻訳者、著作権継承者の方々、発行元や取次、書店や図書館はじめ読者との窓口になってくださった団体や企業、広告の出稿や報道、イベントなどにかかわるみなさまに、心からの感謝を申し上げます。第 10 次「早稲田文学」とそれに地続きの第 9 次の歴史は、みなさまとともにありました。

また、愛読してくれた学生読者のみなさん、さまざまなかたちで発行を応援してくださった教職員の方々、そのときどきに支援を惜しまなかった歴代の総長はじめ各箇所の方々、早稲田文学倶楽部ほか直接・間接的に応援してくださった卒業生のみなさまはじめ、早稲田関係者のみなさまにも、深い感謝を申し上げます。今日の「早稲田文学」への流れを築いた第 7 次編集人、故・立原正秋氏の「早稲田と慶應、同じ力量なら慶應出身の書き手を載せよ」という指針が、文学そのものと発行元である早稲田大学への矜持、そして早稲田出身の書き手や読者たちに対する限りない信頼と激励にもとづくものであると、きちんと理解されてきたことが、そうした支援にあらわれてきただろうことは、言うまでもありません。

私たちがかかわる以前から今日に至る、第 7 次以降の半世紀近い時間のなかで、商業文芸誌とは比較にならない極小の予算と人員で、みなさまに愛読していただくに足る雑誌が作り続けられたとすれば、それは、学内外を問わないそれらすべての方々の応援と、それを全身に浴びてただひたすら懸命にそして誠実に働いた、学生スタッフもふくめ編集室にかかわった数多の仲間たちや、故人もふくめた先達の達成にほかなりません。「文芸雑誌」という存在自体がその意味や形式を問わずにいられない 21 世紀とはいえ、そうした達成が途切れるに至っては筆舌に尽くしがたい思いはむろんありますが、現・編集室のみなさんをはじめ、そこにあった真摯さと懸命さ、そして「文学」と名指されてきたものの持つ崇高を信じた気持ちこそが、なによりとうといものであったと、心からの敬意と感謝を捧げます。

元編集人　貝澤哉
制作総指揮　市川真人